

第1回中間報告

(報告期間 2021/10/5 – 2021/12/17)

国際ロータリー第2710地区

2021-22年度地区補助金奨学生

ジェイムズ常マシュー

報告書提出日 2021/12/21

派遣ロータリークラブ: 広島中央ロータリークラブ

カウンセラー: 西川済様

留学機関: University of York

専攻: MA English Literary Studies

1. 渡英、そして学習開始に至るまで

学生ビザ発行手続きが予定より大幅に遅延し、本来の予定であれば、学期開始の 9/27 に間に合い、かつ自主隔離(費用は自己負担になります)を行った後、講義にスムーズに入れるよう、9/17 に渡英する予定でした。ですが、同日にイギリス政府による水際対策が変更され、「10/4 の朝 4 時以降(イギリス時間)に入国した場合、新型コロナウイルスワクチン接種が 2 回とも完了した入国者は、その旨を証明する公的書類を提示した場合、自主隔離を行わないで良いものとする(入国後の PCR テスト実施は必須)」

となり、経済的観点や動きやすくなるという点から、日本を 10/4 に出発、10/5 現地着と相成りました。

9/27 からの学期第 1 週はオリエンテーション類など新学期開始に当たるイベント期間として設定されており、講義は実質第 2 週から開始となっていました。水際対策の変更のため、学科の担当教官や職員の方に第 1 週の欠席を伝え、配慮して頂きました。(僕の在籍している Department of English and Related Literature では、修士論文の指導教官と別に、学生生活や学習のアシストと言う意味合いで、修士課程の学生全員に学科専任教員が 1 名担当教官として就くことになっています)

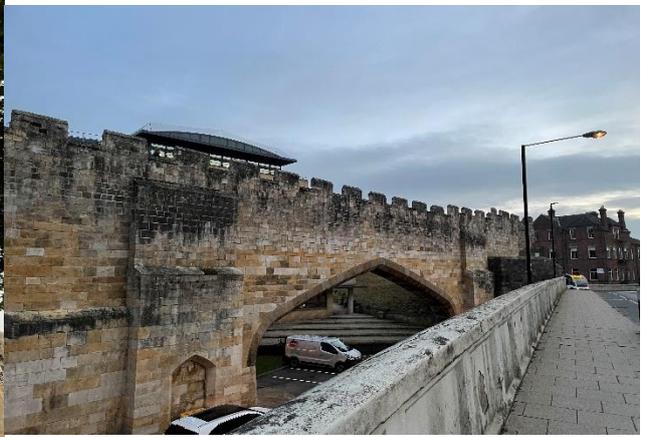
僕の受講した講義は現地着日の翌日に開始されたため、落ち着く暇もなく学習開始となり、肉体的、精神的にもハードな初週となりました。

2. York という場所、そして University of York キャンパス

イギリス北部の都市である York は、イギリス第 2 の都市 Manchester から新幹線で約 2 時間半から 3 時間かかります。古い街並みが多く残っており、市の中心部を 12 世紀から 14 世紀にかけて建てられた城壁が囲んでいます。市の中心部には The Shambles と呼ばれる古い商店街や York Minster という由緒ある教会もあり、中世の歴史がそのまま現在に溶け込んでいる、といった趣です。University of York, York St John University と大学が 2 つあるため、「学生の街」という印象もあります。キャンパスを出て市の中心に出ると、現地の学生だけではなく留学生もたくさんいるため、国際色豊かに感じました。冬の現在、イギリス北部ということもあり冷え込みが厳しく、午後 4 時になると太陽が沈み切り、夜は -5°C にまで冷え込むことが多いです。

University of York のキャンパスはヘズリントン(Heslington)という、市の中心から少し外れたエリア

にあり、Campus West / Campus East と分かれています。敷地面積が非常に広く、キャンパス間を移動するだけでも徒歩で 30-40 分ほどかかります。また、市の中心部に「キングス・マナー」(Kings' Manor) と呼ばれる非常に美しい別棟があり、ここにも僕の所属する学科の専任教員の一部の研究室が配置されています。



(写真左上より、University of York キャンパス、"Kings' Manor", York Minster, 市内中心部を囲む城壁の1部分)

3. 受講した講義

イギリスはワクチン接種が進み、ロックダウンも解除されたこともあり、マスクをしていない人が目立ちます。(渡英直後はマスクを着用していない人の姿が目立ちましたが、オミクロンの発生以後は、急速にマスクを着用する人が増え、ワクチンのブースター接種も開始され、空気にただならぬ緊迫感

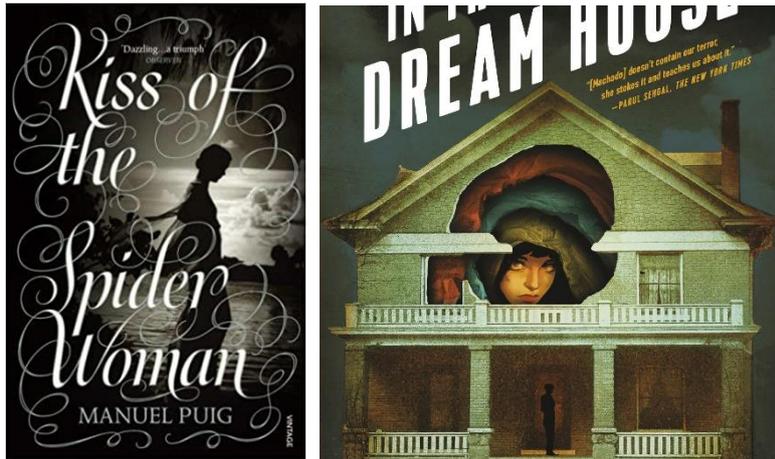
が生まれたのを肌で感じました)

講義は原則対面で行われました。しかし、まだコロナ禍にあることもあり、講義受講の際はマスクの着用が義務づけられました。また、レポートの書き方や修士論文のテーマ設定法と言った、修士課程における研究の基礎を学ぶ、導入 / 必修 クラスである“Postgraduate Life in Practice”(「修士課程の基本、並びにその実践」)はコロナ禍の影響を鑑み、原則オンラインで行われました。(講義内容によっては対面で行われた週もありましたが、9割はZoomなどを経由したオンライン開催でした)

■ “Queer Encounters in Global Literatures and Cultures”

(グローバル文学 / 文化における「クィア」の関わり)

「クィア」(queer)という概念は、“LGBTQ”という言葉の中の1つであり、様々な文化要素を内包し、文学、映画、エンターテインメントなどとも強い関わりを持つ言葉となった現在、その定義は非常に広義に渡ります。代表的な考え方としては、「自身の性的指向(異性愛ではない)が定まっていない人、あるいは、社会の規範から逸れること」と挙げられるでしょうか。また、「クィア」という言葉は、一般的に北米、とりわけアメリカの大都市(New York / Los Angeles など)における白人中産階級の男性同性愛者のみを表していた、という歴史があります。この講義では、アルゼンチンなどのスペイン語圏の文学作品や(英語に翻訳されたテキストを読解します)非白人のアメリカ人の非異性愛者の物語、回顧録、詩集などを中心に、「クィア」がどう表象されるか、また、白人優位だった「クィア」という概念に、どう「クィア文学」として非英語圏作家たちが抵抗の物語を作り上げたか、ということが主題になりました。担当講師のナターシャ・タンナ博士(Dr. Natasha Tanna)はスペイン語圏における「クィア」「クィア文学」、ラテンアメリカ文学、英語圏との比較文学研究、並びにラテンアメリカ圏における地域研究や人種理論を中心に研究されていらっしゃいます。僕自身初めて学習する領域ではありましたが、急速にグローバル化していく世界の中で、「英語圏」「非英語圏」の間の隔たりを、「クィア文学」という概念を通して学ぶことができ、「現代アメリカ文学」を学ぶ者として、関心の相対化や深化につながられたのではないかと感じています。



(画像はこの講義で扱った作品の1部です。左より、*Kiss of the Spider Woman* (1979) – Manuel Puig, *In the Dream House* (2019) – Carmen Maria Machado)

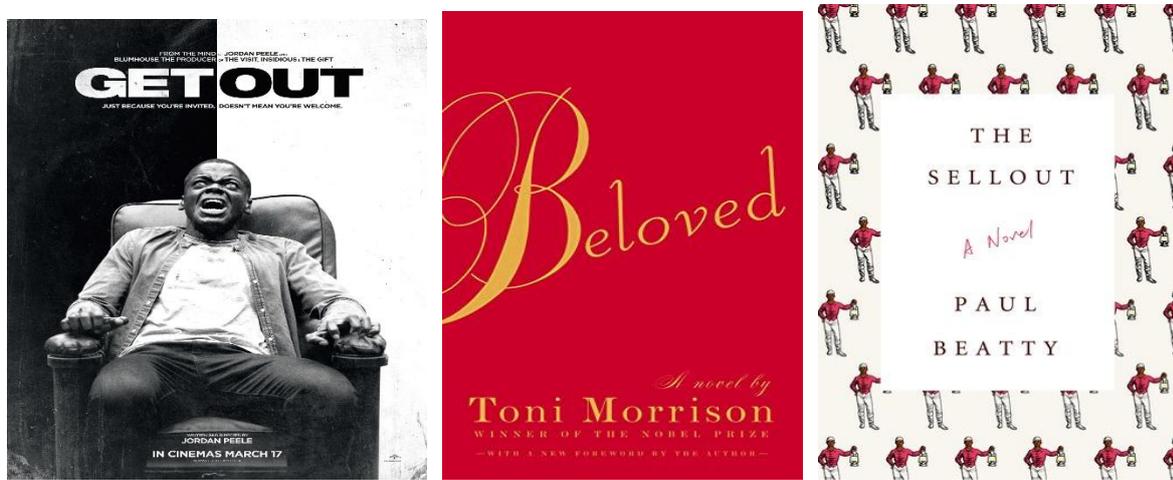
■ “They’ve Gotta Have Us” – African American Film and Literature

(「黒人文化の重要性」 - アフリカン・アメリカンの映画・文学)

2020年、ミネソタ州ミネアポリスで発生した、白人警官による黒人殺害事件(ジョージ・フロイド殺害事件)をきっかけに、アメリカを中心として、英語圏には“#BLM”(Black Lives Matter – 「黒人の命を軽んじるな」と称される抗議運動や、警察の予算大幅削減、人種差別に関わっていた歴史的偉人の銅像の撤去など、社会時勢を大きく変える動きがありました。そのような観点から考えても、アフリカン・アメリカン文学を学ぶ重要性はかつてないほど高まっている、と言えるでしょう。担当講師のローラ・ボーマン博士(Dr. Lola Boorman)は20/21世紀を中心とした現代アメリカ文学・文化、アフリカン・アメリカン文学 / 映画を中心に研究されており、University of Yorkで博士課程を修了された方でもあります。この講義では、アフリカン・アメリカン文学の歴史の中でも、文学史的に非常に意義のある作品や、見過ごされることの多かったインディペンデント映画や作品、あるいは人種差別やホラー、カリカチュアなどと言った、文学と文化のジャンルとの関わりあいを中心に上げ、

(例... Toni Morrison *Beloved* (1988), *Get Out* (2017) – Jordan Peele 監督, Paul Beatty *The Sellout* (2016) – ブッカー賞受賞作品 など...)作品の精読、並びに歴史や現代社会との関わりを批判的に検討しました。現代アメリカ文学の一角をなす領域に改めて本格的に触れ直したことで、アフリカン・アメ

リカン文学の物語の多様さやその面白さのメカニズムを学べたと思っています。また、現代アメリカ文学の他の領域との批判的検討を行う良い機会となったのでは、と思います。



(画像左より、*Get Out* (2017) – Jordan Peele 監督, Toni Morrison *Beloved* (1988), Paul Beatty *The Sellout* (2016))

4. 現地ロータリークラブとのかかわりについて

今年度は、コロナ禍のまだ真っ只中にあるため、現地のロータリークラブとの交流や活動への参加、現地ロータリークラブの方にカウンセラーをお願いできる状態ではない、という判断を受けています。ご時勢柄、ロータリアンとしての活動が非常に制限されていますが、以前アポイントメントを取らせていただいた、ヨークロータリークラブ会員であるマイケル・ヘイ氏に(Mr. Michael Hay)に連絡を取らせていただき、ロータリー奨学生として少しでも活動に関われないか、何か少しでもできることはないか模索しているところです。新年を迎え、ロータリアンとしての活動に進展があるよう、努めていきたいと思っています。

5. これからの予定

新年1月中旬に、受講した講義2つのレポート提出締め切りがあるため、現在レポート執筆に追われています。また、研究者を目指しているため、修士課程修了後の博士課程用の奨学金応募のために、研究計画書や自身の関心ある領域の研究レポートも執筆中です。来月から新学期の講義も始まるため、論文や講義で扱う作品を毎週ひたすら読み込む生活になっていきます。体調にはこれまで以上に万全を期して過ごしていきたいと思っています。少しでも物事や将来のためにいい影響が生み出せるよう努めていきたいです。

今後ともよろしくお願い致します。